

18. ハザードマップをどう見るのか、見るときの注意点は？

Q. どう見るのか？→ A. どんな状況？⇒目的を明確にして「読み取り」「使う」

ハザード（自然災害等）と一口で言っても、地震・津波・洪水・浸水・火山噴火・土砂災害・干ばつ・雪害など、様々な個性を持っています。その特徴によって危険な場所が異なり、避難できる時間（直撃！or 少し時間がある？ など）も異なります。また自分自身や家族の居る場所も、一日の生活のなかや旅行先など、その時々によって状況が異なるため、いろいろな状況に応じた避難経路などを読み取ることが大切です。つまり、ハザードマップを見る際は、ただ「見る」だけではなく「読み取り」「使う」ことが重要となります。いつやって来るかわからない災害に対して「ここは危険な場所だね」でオシマイではなく、こういった危険が潜んでいるので「どう対応しよう？」とイメージする事と「それに対する工夫」が肝要です。以前のコラムにもありましたが、ここで復習です。ハザードマップを使うにあたってのチェック事項 ①自分たちが暮らすところについて。標高や地形、液状化するか否か、盛土なのか地山なのか、建物の造り、家具などの耐震対策、浸水・氾濫の危険、土砂災害の危険域、火災発生時の延焼、災害に応じた避難場所や一時避難場所などになります。 ②通勤や通学路について。災害時を想定して迂回路や通行方法を見直してみる。そして、どのような最悪の状況が想定できるのかを確かめることです。そのときに冠水、切り盛りの道路、がけ地などに気づくこともあります。災害時の迂回路なども話し合っておくことも大切なことです。 ③避難所や備蓄、災害グッズについて。避難所はそこへのルート安全性やどのような自然災害に適しているかどうか確認しておくことが重要で、避難所について過剰な期待はしないことが大切です。また、在宅避難や近くへの避難も検討しておくことが望ましいと思います。そして、災害時に大事なことは食料、水、トイレです。どうすべきなのか、備えとしてどうすればよいのか、防災グッズも必要最小限のものはなにか、について話し合っておくことも欠かせません。

Q. 見るときの注意点は？→ A. どこまで信じて良いの？⇒前提条件を確認する

保険的言い回しとなりますが、ハザードマップの危険区域はひとつの想定です。想定より大きいハザードがやってきた場合、マップに示された範囲より危険区域が広がることが考えられます。危険区域の外だから絶対安全というわけではなく、マップはソフト対策であるということを念頭に置き、ハザードマップ作成時の前提条件をよく読み、そのうえで自分自身の条件（住居・勤務先・旅行先など）を考えて避難場所やその経路をシミュレーションして、自ら対応能力を鍛える訓練をしてみましょう。また、近年多発する豪雨被害の実績を基にハザードマップが見直されている場合があります。古いマップは「それはそれ」で価値はありますが、気象データの解析技術の進歩・地形測量の精度向上・災害シミュレーション技術の向上などにより自治体で公表しているハザードマップも進化しています。最新の情報を盛り込んだマップを見るようにしましょう。